



# フェルメールの生涯 「フェルメール・光の王国展(下)」

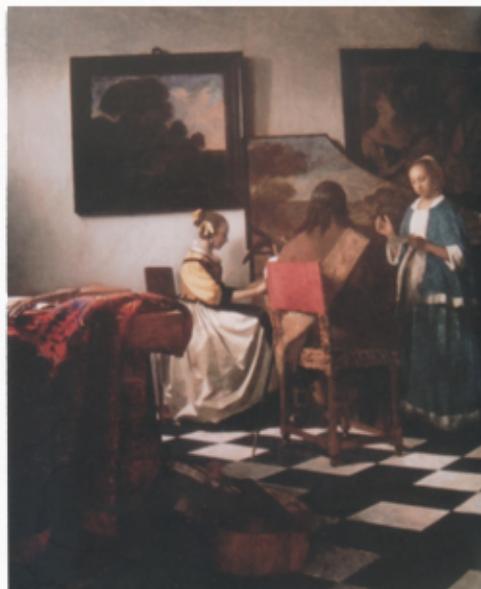
オランダは宗主国・など各地に植民地を築カトリックのスペインき、オランダ海上帝国との八十年戦争の結となつたが、これは日果、一六四八年に独立本にも多くの影響を与え勝ち取る。そしてプえた。鎖国政策をとつていた日本がオランダ七世紀の新しい宗主国とだけは交易し、日本として黄金時代を迎えの西洋文化はオランダを経て入つた。

東インド、カリブ海 フェルメールやレン



フェルメールの代表作「真珠の耳飾りの少女」

一九九〇年、ボストンで盗まれたまま  
行方不明の「合奏」



プラントはその時代の金よりも高価なもので、画家で、ゴッホは十九世紀の画家である。

さて、絵に関心があ十一人の子供を残して人なら「フェルメール・四十三歳で亡くなってブルー」をご存知だろいる。手元には二作品う。鮮やかなブルー、しかなく、莫大な負債代表作「真珠の耳飾りのためその作品も競売の少女」のターバにかけられ、今なら数ンや「牛乳を注ぐ十億円の絵も三千円の女」のエプロンな値しかつかなかつたどどがそれである。いう。妻は破産を申請

彼はこの青を描した。

彼はこの青を描した。今でこそオランダをくため、アフガニスタンでしか産出代表する画家と評価もされなかつた希少高いが、家族にとって鉱物、ラピスラズどんな存在だったのかリを使つたといと、ふと思う。

う。これは当時、芸術家の伝記を読む

と、アルコール依存症そこで水墨画や絵手紙や家族を全く顧みない者もいる。自分のようはボランティアだが、に世の中の価値はなく帰る。ピカソの絵と幼とも、家族を守り育てたのであるから、神の稚園児が書いた絵の区別がつかない私には、人かもと妻は笑う。上手、下手よりも自分が描くことに意味があるように思える。

「ヴァージナルの前に座る若い女」は二〇〇四年に彼の作品と確定し、三十三億円の値がついたという。それほともかく、本物より本物に近い「リ・クリエイト(再創造)」された全作品展は一人の画家を知るのにわかりやすい美術展だった。ところで、デイ・サーピスに週二回行く妻はうに思える。

それはほともかく、本物より本物に近い「リ・クリエイト(再創造)」された全作品展は一人の画家を知るのにわかりやすい美術展だった。ところで、デイ・サーピスに週二回行く妻はうに思える。



33億円の値がついた「ヴァージナルの前に座る若い女」